

ミャンマーの暮らしと商業事情

NPO ザ・コンサルタンツ ミャンマー理事長
経済産業大臣登録 中小企業診断士
都 築 治

<http://www.consul-myanmar.com/>

ミャンマーの暮らしと商業事情

中小企業診断士 都築 治

1 ミャンマー概観

ミャンマーはタイ、ラオス、中国、インド、バングラデシュと境を接し、面積は日本の約 1.8 倍 67.7 万 km²、人口は 53,000 千人（2003 年度推定）の農業国であります。ミャンマーは超多民族国家で、一説では 135 民族が国内に居住していると言われていています。その中でも主力なのがバマ族で、全体の 7 割近くの人口を占めています。

同国は以前は社会主義国でしたが、現在は社会主義の憲法を破棄して、市場経済の道を一步一步着実に歩んでおります。このあたりが、ベトナムなどと違うところでしょう。現在ミャンマーには憲法がありません。日本国内でも有名なアウンサンスーチー女史と現政権は対峙しており、欧米のマスメディアや輿論等に民主化を訴えるスーチー女史らとの話し合いが進まず、新しい憲法が制定できないのです。

ちなみに、ミャンマー最大の民族バマ族では苗字がなく、古代日本や江戸時代の一般庶民のごとく名前があるのみです。アウンサンスーチー女史は建国の英雄で、神格化されたアウンサン將軍の娘で、その関係でアウンサンが苗字、スーチーが名前のように思っている日本人がほとんどですが、アウンサンスーチーで一つの名前です。アウンサンスーチーではやや長すぎるので、一般的にはスーチー女史と称されています。



ヤンゴンのスーレーパゴダ通り

ミャンマーの GDP の産業構成比は、農業 48.8%、漁業・畜産 7.8%、林業 0.5%、エネルギー 0.2%、鉱業 0.4%、製造業 7.7%、電力 0.1%、建設 2.0%、運輸 5.6%、通信 0.2%、金融 0.1%、社会・行政 1.6%、その他サービス 1.4%、商業 23.6%となっています（2000 年度推定）。

実質 GDP は 113 億 \$、実質 GDP/人は 180 \$ と推定されていますが、複雑な為替制度やその他の要因により、正しい数値はつまびらかでないようです。GDP の数字だけから考えますと、非常に貧乏な国になってしまいますが、統計に表れない部分が多く、世間で言われているような世界の最貧国では決してありません。自給自足、物々交換、売上高の自主申告、帰順反乱分子の懐柔策などにより、捕捉し得ない部分が余りにも多いからです。

ミャンマーでは、車の通行はイギリスの領土であったにも関わらず、右側通行になっています。ほとんどの車両が中古の右ハンドルの日本製で、このアンバランスには驚かされます。イギリスの占領政策が、いかに嫌われていたかの証左ではないでしょうか。「イギリスが嫌いだから、わざと右側通行にした」との話をしばしば耳にします。

2 ミャンマーのインフラ

ミャンマーは長い間社会主義国でありました。それもマルクス・レーニン主義によらない独自の社会主義を唱えていました。そのために、「バマ一式社会主義」と言われていました。上座部仏教の思想と、日本の軍隊のシステムを倣ったところが多分にあったような感じがします。

日本では一時マルクス・レーニン主義が正義で、資本主義はそれに対立する概念と言う考えが、言論界で優勢を占めていました。そのために、ベトナム、カンボジア、ラオス、中国、北朝鮮などに好意的な人が、ミャンマーとなると、軍政国家だという論理で批判的な態度を示すことも多いようです。

社会主義の実験は終わりました。多くの社会主義政権国は崩壊してしまいました。社会主義の理論はどうやら正しくなかったようです。ミャンマーも同様に、社会主義の政権はもろくも崩れ去ってしまいました。

社会主義時代の後遺症で、ミャンマーのインフラ整備は遅れています。日本の経済援助が現在事実上ストップしていますから、その整備は遅々としたものです。しかし、近年中国からの経済援助が盛んになり、徐々にインフラ整備が進んで来ました。

ミャンマーの人によく言われます。「中国が一生懸命にやってくれますから、日本にはもはや期待していません。」

そのために、ヤンゴン市内では停電が少なくなったとも聞きます。各地の道路事情も好転して来ました。エーヤワディー川などの大河には、長い橋が何本も懸かるようになりました。最近、インドがミャンマーに力を入れるようになったとの報道をしばしば耳にします。

現在のミャンマーの状況は、日本の昭和 30 年代初頭の感じを連想されると、その感じがよくつかめます。日本国もまだ貧しい状態でした。昭和 30 年代に入ってようやく貧乏から脱却し始めました。ミャンマーの現状は、当時の日本を見るようです。

往時の日本のように、数か月後に再度ミャンマーを訪れますと、街の景観などが見違えるような状況になっておりびっくりすることがしばしばです。

3 ミャンマーの国民性

ミャンマーの国民性は、日本人とよく似ています。恥ずかしがりやで、余り自己主張をしない人が多いようです。また、日本人と同じような笑い方もします。ミャンマー語の語順は日本語と同じで、「てにをは」のような助詞があります。遠い昔、チベット高原を南下したのがミャンマー人、東北に向かったのが日本人と考えているミャンマー人が多いと言われています。

以前、ミャンマー第 2 の都市マンダレーの商工会議所の議員諸氏と会談したことがあります。日本側の代表団は何人も質問するのですが、ミャンマー側からは何等の質問も返って来ませんでした。唯、会頭さんが役目柄喋るのみです。このように自己主張が少ないことは、日本人の精神構造と極めてよく似ています。ミャンマー人の有力者からは、「日本から武士道を学んだ」との話もよく耳にします。

また、全体的に日本人のように勤勉な人が多いように見受けられましたが、中国人やインド人と比べると、商人としてのどん欲さにはやや欠ける面があるように思われます。その面、実直な人が多いとも言えます。ミャンマーの人と話していると疲れませんし、日本国内にいるよりもむしろゆったりとした気分になることができ、不思議な感じさえします。日本人にとっては、阿吽の呼吸で相手の気持ちが分かり合える、数少ない国と言うことができます。

4 中心都市ヤンゴン

ヤンゴンはミャンマーの最大の都市で、現在の人口は 450 万人とされています。街の中心部はかつての領主国イギリスによって都市計画され、碁盤目のように区割りされています。

その中央部分にスレーパゴダがあり、ランドマーク・タワーとなっています。スレーパゴダは金箔で覆われ、夜間になるとライトアップされ、終日光り輝いています。同パゴダの西側がインド人街、さらにその西側が中国人街となっています。インド人街の北側には、有名なボージョー・アウンサン・マーケットがあります。ボージョーはミャンマー語で將軍を意味します。ボージョー・マーケットはヤンゴン最大のマーケットです。

96 年の 12 月に、最初にヤンゴンを訪問しました。その時、中国人街を散策しミャンマー特産のシャンバッグを購入しました。店の人に安くしてくれるように交渉しましたが、応じてくれませんでした。その時、たまたま米 \$ しか持ち合わせがなく再度現地通貨を持って行ったものですから、今度は店の方で気持ちだけ安くしてくれました。その時買った値段は 170 チャットです。日本円に直すと、当時のレートで 140 円程度でしょうか。シャンバッグは布製のショルダーバッグで、多くの日本人はミャンマー訪問のお土産として買って帰ります。

また、その時同行した連れの診断士が、ボージョー・マーケットに程近い所にある眼鏡店でメガネを購入しました。店の名前は Y E 眼鏡店と言いますが、一式で 20 米 \$ でした。当時のレートは 1 \$ 100 円程度でしたから、2 千円と言うことになります。その診断士が記念の写真と言うことで、検眼してくれた女医さんと一緒に写真を撮りました。

た。その時、女医さんの肩に手を回したものだから、女史はびっくりとしてしまいました。後で知ったのですが、人前で女性の肩に手をやるなどはあり得ない行為だということを知りました。

5 ミャンマー最後の王朝のあったマンダレー

マンダレーには、すでに 10 回以上訪れています。現在の人口は約 100 万人とされています。ヤンゴンと比べると中国の雲南省に近く、中国の影響が色濃く表れています。

市の中心部には王城跡があります。王城内では王宮が再現され、当時の面影を残しています。王城は堀で巡らされており、京都御所の感じよりどちらかと言えば二条城に近い感じです。王宮は第二次世界大戦の時に、日本軍とイギリス軍との戦いで徹底的なダメージを受け炎上してしまいました。ミャンマー政府は 96 年 11 月からを観光年と定め、そのために王宮が急遽再建されたのです。

マンダレーはミャンマー最後の王朝のあった所で、そのために見どころは沢山あります。マンダレーの周辺には、興亡した幾多の王朝時代の名残があります。日本の近畿地方を連想されると、その雰囲気を感じられると思います。マンダレーに住む人はその他の地域に住む人たちと比べると、京都人のように何となくプライドの高さが感じられ、興味を引きまます。



マンダレー最大の市場ゼーゾー・マーケット

首都ヤンゴンの市内は自動車渋滞し、市街地では二輪車は禁止されていますが、マンダレーではオートバイ、自転車がいっぱい走っています。自転車のほとんどは中国製ですし、驚くことは、メイン通りではなく横道の道路幅が 40m 近くも

あることです。その中央部は簡易舗装がなされていますが、その他の部分は未舗装のままです。経済力が向上して来れば、強力な武器になりそうです。

6 地方都市

ミャンマーでは、国内各地に人口 10 万人以上の都市がいくつも見られます。国土の多様性、各民族による幾多の王朝が興亡した歴史、イギリスの占領政策による拠点づくりなどによるものと考えられます。このあたりが、タイの極端なバンコク集中型と趣が違ってくるのです。

仏教徒が大半であるバマー族、モン族、シャン族などの民族が中心の都市では、街中に金箔のパゴダが見られます。キリスト教徒が多いカチン州では教会の姿が多く見られ、独特な都市景観となっています。ミャンマーでは信仰の自由がないなどと言う人が、日本の一部文化人の中にさえ見られますが、全く見当違いです。かつてのマルクス・レーニン主義による社会主義国を類推した考え方から来たものと思われる。

都市には、必ずのようにマーケット（ゼー）があり、街の中心となっています。地方都市へ行きますと、少数民族の人たちが特産品を持って集まって来る様が見られ、ミャンマー観光や視察の楽しみの一つになります。

シャン州のラショー、ムセ、ナムカンなどは中国の影響が、マンダレー近郊にあるピンウールーウィン（旧名メイミョウ、メイはイギリス人のメイ大佐、ミョウはミャンマー語で町を意味します）などはイギリス統治時代の雰囲気が、ザガイン管区の主要都市の一つモンユアなどではインド交易の影響の様が見られます。

ミッチーナやタウンジー（それぞれカチン州、シャン州の州都）などは日本の田舎都市の風情ですが、風格が感じられます。シュエポーは、ミャンマー最後の王朝を興したアラウンパーが築城したコンバウン王朝の最初の都ですが、鄙びた田舎都市となっています。

その他マグウェやピィ、パテインなどの地方の主要都市も、それぞれ独自の景観を示しています。日本の画一化された各都市と異なり、ミャンマーでは地方色豊かな都市景観が多く見られます。

7 ミャンマーの経済事情

ミャンマーは第二次大戦後イギリスから完全独立し、1962年から88年まで、26年間に亘って社会主義国でした。当時は、世界的に社会主義国がもてはやされた時代だったのでありますが、そのためにミャンマー経済は停滞してしまいました。

60年代初頭は、ミャンマー当時のバマーは東南アジア屈指の強国でした。国連の事務総長にウ・タン(U THANT (ウは男性の尊称)が就任するなど、近隣諸国と比べるとその国力は抜きん出ているように思われます。当時のバンコクの日本駐在人は、ラングーン(現ヤンゴン)まで買い出しに出かけたものであるとの記事をよく目にします。

1988年に「バマー式社会主義」経済体制は崩壊して、市場経済化と開放経済化が進行していません。民間投資が大幅に規制緩和された結果、各セクターでは民間部門の生産額が国有部門を上回るようになりました。

社会主義時代は農産物の取引が制限されていたため、生産意欲に乏しい面がありました。また、タイ、中国など隣接国との間での国境貿易が公認された結果、貿易額が大幅に拡大しています。しかし、97年のアジア経済危機の影響により、98年度の経済の伸び率は頓挫してしまいました。99年度以降は再び伸びを示すようになったようですが、公式な数値がなかなか発表されなくなりました。

中国との国境貿易の町ムセでは、中古の10トントラックに何十トンもの荷を満載した車が、数百台も通関待ちのために待機している様子をみたことがあります。ムセからは一昼夜でマンダレーに到着可能です。

ミャンマーは農業が最大の産業の国で、工業生産面では特に世界に誇れるモノは見当たりません。その代わり地下資源には恵まれており、近年天然ガス田の開発が進んでいます。またミャンマーは宝石大国で、日本で取り引きされているルビーや翡翠、サファイアなどは、ミャンマー原産のもの圧倒的に多いと考えても間違いのないでしょう。

8 ミャンマーの商業事情

ミャンマーの各地を視察いたしますと、ゼエー(マーケット)が多いのが目に付きます。そこでは日用品と共に食料品がよく売られています。食

料品は目方で量られて売られていますが、地方のマーケットでは、分銅代わりに液漏れした単一の乾電池が広く使われているのにはびっくりしたことがあります。乾電池は色々な製品に使われていますから、分銅よりも信頼性が高いのかも知れません。

一般のマーケットでは、定価というものはありませんから相対で値段を決めます。日本人がお土産として現地の民芸品などをマーケットで買う場合、価格交渉をしなければなりません。言いなりで買うと、かなり高い買物をしたこととなります。また、店舗を構えて正価を表示しているような店の場合、全く価格交渉に応じない店もまま見られます。この当たりの見極めが、土産品を買う場合など大切になります。

ヤンゴンの最大のマーケットは、先に述べたボージョー・アウンサン・マーケットです。そこでは日用品、衣料品、民芸品、骨董品、宝石などお土産にするようなものは、あらゆるものが揃っています。マーケットの右隣がFMIセンターで、日本的高级専門店ビルのような感じとなっています。衣料品店などファッション関連の商店が充実しています。



左側の建物がボージョー・アウンサン・マーケット、
奥の建物がFMIセンター

マーケットの向かい側地区は商店街を形成しており、あらゆる物が売られています。本屋、眼鏡屋、かばん屋など、同じ業種の店舗が集中的に集まっています。そのため、買い物するには大変便利です。旅行用のかばんなどを購入すると、大変安く買うことができます。観光やミャンマー語学習用の書籍なども、ホテル内の店で売られているよりも相当安く売られています。

電化製品、カメラ、時計などは、日本で言う中型のショッピング・センターでも多く売られています。ヤンゴン市内には、何か所もショッピング・センターが見られるようになって来ました。そこでは、欧米のブランド品も数多く見られるようになりました。かつての秋葉原のような電器屋街も形成されています。日本製のブランドと韓国のブランドがよく目に付きます。

市街の中心部のスレーパゴダ通りには、以前免税店がありました。酒類と共に、日本の醤油や味噌、そば・うどんなど日本食の食材が数多く売られており、そこで、観光案内の冊子を買ったことがあります。東京の神田で買う価格の半値位でした。

ダウンタウンを歩いていますと、食堂や喫茶店がよく目に付きます。最近、店内がとみに明るくなって来たように感じられます。また、以前見られなかった靴やベルトを売る店が目立つようになりました。ミャンマーでは、男も女も巻きスカート（ロンジー）を着用し、素足でゴム草履履きが通常のスタイルです。ズボンや靴を履くということは、各家庭にエアコンが普及しつつある兆しとも考えられなくはありません。経済力が向上しなければ、エアコンを家庭で使うことはできません。

市内では、布製のシャンバッグではなく、皮革製のバッグを肩に下げている人が目立つようになりました。女性の一部では、短めなスカートを穿く人も現れるようになって来ました。ファッション感覚がますます向上し、おしゃれな人が増えているようです。そのため、婦人服専門店が随所で見られるようになりました。数年後には、日本人女性観光客の観光スポットになるかも知れません。

現在ミャンマー最大の娯楽となっているのは映画で、映画館の建物が市街の各所で見られます。このあたりも、日本の昭和 30 年代初頭の光景とよく似ています。80 円位払うと、比較的良い位置で見られるそうです。しかし、ビデオの普及の関係か、近年映画館が少しずつ減少しているように感じられるようになりました。

ボージョー・マーケットの向かい側には、日本人の経営するトウキョウ・フライド・チキンの店があり、ヤンゴンの人たちの人気スポットとなっ

ています。また、欧米感覚の明るい喫茶店も各所で見られるようになりました。

しかし、全体にまだ多くのヤンゴンの商店の店舗は間口が狭く、店内が薄暗いままになっています。店内が暗いと清潔感に乏しい感じがします。したがって、日本人旅行者には汚らしく感じられ、入店し難い店舗となっています。外国旅行をしますと、日本の商業の仕方との比較ができ、参考になることが多いように思われます。

9 ミャンマーの食べ物

ミャンマーの醤油は魚醤です。魚類を発酵させて作った醤油ですから、独特のにおいがあります。このにおいと食用油をたっぷり使った料理が平気でしたら、ミャンマーで食べ物に困ることは全くありません。同国の料理は、中華料理とインド料理双方の影響が強く出ており、油で炒めたもの、豚やチキンのカレーなどが主力です。

牛は農耕や牛車用として広く使われ、いわば家族と同じような立場ですから、ミャンマー人は、牛肉はあまり食べません。

主食はお米ですし、豆腐や納豆のある地方もあります。ただし、米はインディカ米主体でジャポニカ米ではありませんから、ねばり気はありません。その代わりに、チャーハンやお粥にすると大変美味いいただけます。ちなみに、美味いと言うミャンマー語は「アヤダーシデー」（意味は、味がある）です。ご飯は「タミン」で、日本語と同じように食事と言う意味もあります。

ジャポニカ米や、日本古代食の赤米や黒米が食べられる地方もありますし、ヤンゴンの露天では小豆で炊いた赤飯を売っている店もあります。全く日本のお赤飯と同じ味でした。

ミャンマーでは多くの国民は川魚を食いますが、海の魚は余り食べないようです。ミャンマーの最大の民族であるバマー族は元来騎馬民族で、チベット高原から雲南を経由して、シャン高原を南下した民族です。そのために海の魚を食べる機会がありませんでした。海岸へたどりついたのはそんなに昔のことではありません。このために、海の魚を食べる習慣がありませんでした。多くのミャンマー人は、海の魚を食べるとおなかをこわすと広く信じています。

このような事情があるために、一部のタイの業者が漁獲権を獲得し、近海で魚を捕獲して冷凍して日本に輸出しています。近海では海老も大量に捕れ、シンガポールと合併のミャンマー政府の国策会社や民間の私企業などが日本へ輸出しています。海老は養殖ではなく天然物中心で、衛生管理を万全にして日本へ輸送していますが、刺身として食べるには、やや基準が甘いとの日本の専門家の指摘もあります。

国民の大半が戒律の厳しい上座部仏教を信仰する国ですから、酒類は余り飲まないようです。日本酒、ワイン、ウイスキーなどのような各国を代表するような酒はありません。仏教遺跡で有名な古都バガンの郊外で、さとう椰子の樹液を発酵させて作った蒸留酒を飲んだことがあります。日本の焼酎のような風味です。

ミャンマーには現在四つの銘柄のビールがあります。マンドレービール、ミャンマービール、ダゴンビールとスコールビールです。ダゴンビールとスコールビールは最近作られたビールで、レストランで注文しても余り出て来ません。ミャンマーで作られたビールは、レストランでは1瓶 200円程度で飲むことができます。シンガポールのタイガービールや、ハイネケン、日本産のビール等もレストランのメニューにあります。それらのビールは、日本で飲むのとほぼ同程度の料金が必要です。

ミャンマー製のビールは余り苦くなく、お酒の好きでない人にとっては日本のビールよりも飲み易いかもしれません。ダゴンビールの「ダゴン」はヤンゴンの旧名です。スコールビールは、アルコール度が大変強いビールと聞きました。

10 おわりに

現在のミャンマーの商業は、活気を呈していると言ってもいいでしょう。街中に物があふれ、各

店舗は人でごった返しているような感じさえしません。かつての日本の多くの商店街は、このような状況でした。シンガポール随一の繁華街オーチャード通りでは、日本の現在の商店街のように空店舗が見られるようになっています。周辺部が充実して来ているがために、空洞化現象を起こしているのです。

ヤンゴンの街も整備され、やがては超近代的な街並みに生まれ変わるものと思われます。社会主義の国であった関係上国有地がほとんどですから、生活している人の居住権はありますが、権利関係は日本ほど複雑ではありません。この利点をうまく生かすことができるならば、今世紀の遠くない時期に東南アジア屈指の大都会になるでしょう。ただし、無機質なコンクリートのジャングにはしたくありません。

同国の商業が活気を呈して来ているのは、競争原理が働いているからです。同業者が集積すればする程、競争原理は働きます。競争のない所には発展と言う言葉はありません。多くの日本の街づくりは、競争回避、平等主義の国是？から、一般の人にとっては他地域の商店街との違いが感じられないものになっています。ある商店街が繁栄するということは、競合する他の商店街の犠牲の上に成り立つことです。犠牲をより少なくする方法は、機能を分散させることです。

新しいヤンゴンの街づくりにおいても、各商店街機能を適切に配置することが大切かと考えられます。

[トップに戻る](#)

[ミャンマーの歴史](#)

[ミャンマー旅行記](#)